

宝塚記念出走時刻まで、後30分。ゴールまで残り8km。サロマ湖100kmウルトラマラソンにて、80km地点を過ぎた瞬間、これまで動けなくなっていた私の足が急に復活し、通常の1時間10kmペースほどのスピードで走れるまで回復した。全身疲労困ぱいはもちろんだが、なによりも足の疲労が一番の苦痛だった。この苦痛さえなければ、気持ちよく100kmを走り切ることができ、なおかつ、デイリーインパクトの出走する宝塚記念の実況が聴けるのに。残り8kmを30分で走るのはいくらなんでも不可能である。100kmをゴールした後、ラジオで宝塚記念の実況生中継を聴くのが私の大いなる目標であった。

大阪在住で29歳の地方公務員の私はマラソンと競馬を趣味としている。マラソンは役所に勤めだしてから始めたもので、主に超距離走に主眼を置いている。スピードはないが持

久力にはたけたものがあると自負している。よって10 kmより短いレースには出走したことがなく、フルマラソンや100 kmウルトラマラソンばかりに出走している。自己最高は、フルマラソンは3時間36分、ウルトラマラソンは11時間48分を記録している。長距離走の魅力は短距離走と違いまったく運動的才能がない者でも、鍛えれば鍛えるほど、記録が伸び、目に見えるような成果が挙げられることだ。私みたいな凡人でも努力の成果を挙げる事が容易くできるので長距離走にはまってしまったのだろう。

一方、競馬の趣味に関しては、十数年前、この4月に亡くなったメジロマックイーンの世界に魅了され競馬ファンになった。馬券の方は主観的な買い方しかしないので、ほとんど当たらない。そういうわけで、馬券を買うよりも、競馬のレースそのものを見て楽しんでいる。そのうえ、メジロマックイーンの影響を受けてなのか、競馬もマラソンと同様に

長距離レースを好む。菊花賞、有馬記念、阪神大賞典はほぼ毎年、現地に観戦しに行っている。国内海外問わず競馬を見に行っているが、短距離のGIレースだけを見に遠方まで行ったことは一度もない。これは、マラソン同様に短距離レースに余り興味がないということを示しているのだろう。短い距離では見るのも走るのももったいないのだ。しかし、サラブレッドはより高速化し、長距離レースは廃れていくのが、現状である。マラソンも世界的にみて注目度が低くなりつつある。競馬も陸上もよりスピードを求められているのが現状であり、私のように長距離に価値を置くことは、時代の流れに逆行しているとも言えよう。

2006年6月25日日曜日開催のサロマ湖100kmウルトラマラソンに出場するため、前日、北海道へ旅立った。このサロマ湖ウルトラマラソンは、日本の100kmマラソンの

先駆的存在であり、ウルトラランナーにとってあこがれのレースでもある。これまで3回100kmマラソンを完走した私にとってサロマは、やはり一度は走らなくてはならないマラソンとして位置づけられていた。

また、マラソンだけのため北海道に行くのは、もったいないので、ついでに北海道の競馬を見に行くことにした。調べるとマラソン翌日の月曜日は、岩見沢のばんえい競馬開催日だったので、マラソン翌日は、札幌近郊の岩見沢まで行くことにした。こうして私は、北海道にて、マラソンと競馬の二大趣味を満喫する二泊三日の旅をすることとなった。

しかし、ひとつ懸念しなくてはならないことがあった。宝塚記念にデイーパインパクトが出走することだ。天皇賞出走後、海外遠征するということ、私は宝塚記念には出走しないものと思いついでいた。だから、デイーパインパクトが未出走で、なおかつ京都開催の宝塚記念を見に行く価値はあまりないと思

い、同日開催のサロマへの出走に踏み切ったのだった。しかし、私の思い込みとは、裏腹に宝塚記念に出走してきたのだった。

6月25日日曜日、大会当日、午前2時起床。宿出発の午前3時ごろには、サロマ湖に日は昇りつつあった。午前4時湧別町のスタート地点へ到着。いよいよ午前5時、100kmのスタート。湧別からサロマ湖畔沿いを北見市の宇呂まで制限時間13時間で100kmを走り抜く。午後15時30分ごろゴールすれば、ラジオで宝塚記念を聴くことができる。すなわち100kmを10時間30分で走り切ればよいのだ。果して、スタートは切られた。雲ひとつない北海道の朝は涼しい。このスタートした時が、私にとって一番感動する瞬間だ。これから長い時間、どのようなドラマが待ち受けているのか、これが超距離走者だけに許された楽しみでもあり、恐怖でもあった。10km65分ペースで走っていくつもりだったが60分を少し切るペースで進んでしまった。

サロマは道が延々と平坦で記録が出やすいと聞いていたが、まさにそのとおりで、自分としては抑えたつもりが、速度を上げ過ぎていた。100 km マラソンで重要なのは、ペース配分である。前半速く走り過ぎると後半必ずばててしまうのだ。そんななか、50 km 地点を5時間03分で通過した。この調子でいくと、10時間30分ぐらいでゴールし、宝塚記念に間に合うという希望もわいてくる。一方、これは乱ペースであって、後半に大失速するとも考えられる。これが、ウルトラマラソンの計算の難しいところである。

だが、55 km 過ぎで異変が起きた。足が急に重くなりスピードが落ちていったのだ。それから、後続のランナーに抜かされ放題。前半をもっと抑えるべきだったのだろうか。晴天で気温も20度は超えていただろう。抜かされ続ける屈辱と疲労で、サロマ湖の美しい光景やボランティアの応援も心にしみてこなくなかった。宝塚記念どころか、11時間切りも

難しくなってきた。そのまま、80 km地点まで、10 km 80分ぐらいのペースまで落ちた。気持ちも暗いまま、このままサロマを終えてしまうのかと絶望的になってしまった。

だが、奇跡は起こった。残り20 km、神がかりが起きたと言っていていいだろうか、前を進むランナーを次々とごぼう抜きしていったのだ。そして、栄光のゴール。タイム10時間56分。宝塚記念が終わった15分後だった。携帯電話で宝塚記念の結果を見て思わず、ほくそ笑んでしまった。

6月26日月曜日、マラソン後の楽しみである岩見沢競馬場へ昼ごろ到着した。私にとつて行ったことのない初めての競馬場に入る瞬間のときめきは言い知れようがない。平日の岩見沢競馬場は人もまばらだ。晴天で時折涼しさも感じられる絶好の競馬日和と言えるなか、私は筋肉痛の足を引きずりながら、カメラとばんえい金太郎という専門紙を持って、

競馬場中を駆けずりまわった。

数年前、旭川競馬場へばんえい競馬を見に行った時、専門紙通りに馬券を買ったら、かなり儲かった。よって、今回も専門紙通り買って見たが、結果はさっぱりだった。

パドックでは、1 t 前後のばん馬がのっしのっしと厩務員に引かれ、そこから騎手が馬に乗って馬場に入場する。この小さい騎手と巨大なばん馬とのアンバランスに見える組み合わせでの本馬場入場では、平地競馬のような緊迫感がまだ伝わってこない。しかし、ばん馬にソリが繋がれると勝負の気迫がみなぎり始めてくる。1 t ほどの重量物を引きながら、距離 200 m の直線コースにある二つの障害を越えて、ソリの後端がゴールを通過するまで進まなくてはならない。ゲートが開くと一斉に高さ 1 m の第一障害まで駆け登り、降りの勢いによって中間地点まで進む。ここらあたりから進行に差がでてくる。もうすでに第二障害を登り始めようとする馬もいれば、



登頂前で止まっている馬、まだ中間地点をゆつくり進む馬もいる。ばんえい競馬の一番の見せ所は、この第二障害である。第一障害目の勢いはなく、疲労も著しい状態で、高さが1.7 mある山を越えなければならぬのだ。中には、第二障害を登りきれず、競争中止する2歳馬もいた。この第二障害を越えれば残りの力を振り絞りゴールまでソリを引いていく。本命馬が一番で第二障害を降りきり、そのままゴールしてしまうのかと思いきや、ゴール直前でばてて動かなくなってしまう、後続馬に抜かされてしまうこともあった。

ばん馬ならではの楽しみ方は、観客がスタートからゴールまで馬の進行に合わせてコース沿いを歩いて応援することができることだ。写真を撮るのもよし、怒鳴るのもよし。人も少なかったのではばん馬を身近に堪能できた。私はばん馬を見ながら思った。昨日、私がサロマで走った距離は100 km、今日のばんえい競馬は200 m。どちらも競争ではある

が距離の差にして500倍。しかし、よく似ているところがある。それは、どちらも持久力を争うところである。100kmマラソンは距離に打ち克つ持久力、ばんえい競馬は重さに耐えうる持久力。どちらもスピードがあるものではない。100kmマラソンも走りっぱなしではなく、途中足を止めて食料や水分を摂取する。ばん馬も途中で休み体力を温存する。平地競馬はおろか、競争というもので、途中で足を止めるものはあまり思いつかない。

だが、現代社会では、めまぐるしく変革する時代に対応できるスピードが求められている。このような時代にこれから100kmマラソンやばんえい競馬が繁栄していくとは考えづらい。それでも、持久力で勝負できる自分やばん馬には誇りをもってしかるべきだと思ふ。いつかは、旧来の日本社会のように長きを重んじ、持久力が見直される時がくることを願う。サロマ湖と岩見沢、500倍の距離の差はあったが、共通する願いは深い。